

# 地域活動に「貧困」の視点を



阿部 彩さん  
国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部長  
聞き手 編集部

2008（平成20）年の世界同時不況により大量の失業者が生じ、「派遣村」がニュースで大々的に取り上げられたことをきっかけに、私たちは、わが国にも深刻な貧困問題が存在することを知ることとなった。貧困問題の研究者・阿部彩さんによると、日本の貧困は今に始まったことではなく、30年前ごろから増加しはじめてきたのだという。私たちは目の前における貧困を、これまで「見てこなかった」のである。一個人として、根本的解決が難しいと思われる貧困問題に対して、どう向き合っていくべきなのだろうか。阿部さんにかがった。

## 相対的貧困は「普通の生活」 ができない状態

「貧困の指標に「相対的貧困率」が使われていますが、「相対的貧困」とは、どのような概念なのでしょう。

**阿部** 貧困を語る場合、「絶対的貧困」と「相対的貧困」という2つの概念を用います。ほとんどの人たちが「貧困」と聞いてまずイメージするのは、開発途上国で飢餓に苦しむ人々や、第二次

大戦後の食料不足で苦勞した日本人の姿だと思えます。こうした最低限の衣食住を満たすことができない、生命の危機に瀕している状態は、絶対的貧困と定義しています。これに対して相対的貧困は、現在そこに暮らす社会の中で、誰もが当たり前と感じている生活が送れない状態です。すでに経済が発展した国では絶対的貧困は根絶されたといい前提で、アメリカや日本などの先進諸国で貧困問題を論じる場合には、相対的貧困を用います。

## 相対的貧困率（経済協力開発機構：OECD）

手取りの世帯所得（収入から税、社会保険料を差し引き、年金やほかの社会保障給付を加えた額）を世帯人数で調整し、その中央値（平均値ではなく真ん中）の50%ラインを貧困基準（貧困線）とする。子どもの貧困率は、すべての子どものうち、貧困線以下にいる子どもの割合。厚生労働省の公表しているのも、OECDと同様の計算方法。

現在、日本の相対的貧困率は16%、子ども（17歳以下）の貧困率は15.7%（2010年厚生労働省調査）。

## PROFILE ●あべ・あや●

マサチューセッツ工科大学卒業。国際連合、海外経済協力基金にて勤務。1995（平成7）年、国立社会保障・人口問題研究所。研究テーマは貧困・社会的排除、公的扶助論、社会保障論。著書に『子どもの貧困－日本の不公平を考える』（岩波新書）、『弱者の居場所がない社会－貧困・格差と社会的包摂』（講談社現代新書）などがある。

「相対的貧困は、それぞれの国の事情によって変わるのでね。」

**阿部** 具体的にどうということかという  
と、たとえば経済的な理由で親から給  
食費を出してもらえず、家からおにぎ  
りを持ってくる子どもがいるとしま  
す。この子どもは栄養学的には大きな  
問題がなく、飢え死にすることはな  
いかもしれませんが。しかし、この子ども  
にとつて、一人だけ給食が食べられな  
いという精神的ダメージや疎外感は大  
変大きいものです。ひよつとすると、  
このことでいじめも受けるかもしれま  
せん。これが相対的貧困です。

今、子どもたちの世界では、ゲーム  
機を持っているのが普通で、ゲーム機  
を持っていないと友達に輪に加えても  
らえないという現実があります。正直、  
私も子どもを持つ親として「そんなも  
のが必需品なんて」と嫌悪感さえ覚え  
ます。しかし「社会全体でゲーム機が

必要か」という議論と、「ほかの子が  
全員持っている中でこの子に必要か」  
という議論は別のものです。前者は絶  
対的貧困の議論、後者が相対的貧困の  
議論です。

携帯電話にしても同様です。10年前  
ぐらいまでは携帯電話を持たないでが  
らばっていた人もいましたが、今は国  
民の90%以上が持っています。携帯電  
話が国の豊かさを表すものかは分か  
りませんし「なんとなくやだな」と思っ  
ている人もいっぱいいると思います。  
でもこの社会では必需品であることは  
疑いようのない事実です。携帯電話が  
なければ、もはや社会生活を送ること  
も困難です。

相対的貧困というのは、ほかの人が  
当たり前前にしている「普通の生活」が  
できない状態を言うのです。

—現在、相対的貧困率は16%と公表さ  
れています。地域をみていく保健師は、

この数字をどのようにとらえたらよい  
のでしょうか。

**阿部** 地域をみている保健師さんたち  
は、いろんな問題を抱える人たちを目  
にすることが多いと思います。たとえ  
ば非正規労働者で年収が120万円し  
かない母子家庭で児童虐待が起こっ  
ていたり、ゴミ屋敷になっていたりす  
るとします。精神問題を抱えているなら  
医療につなげなければいけない、ゴミ  
屋敷のゴミを片付けなきゃいけない。  
そういうふうアプローチしていくの  
も一つの方法です。むしろそれが保健  
師さんの役割でしょう。

しかし、それと同時に「非正規労働  
者が120万円しか得ることができな  
いんだ。そんなに厳しい状況に置かれ  
ているんだ」という視点も重要です。  
私はよく、地域で活動している人に、  
ある問題を指して「これは貧困問題だ  
けのことじゃない。お金をあげて解決

する問題じゃないよね」とよく言われ  
ます。それは確かにそうです。低所得  
だけの問題ではありません。虐待にし  
ても依存症にしても、お金を渡したか  
らといって、どうにかなる問題ではな  
いと思います。でも多くの問題が低所  
得層に偏っているのも事実です。「な  
ぜ中卒など学歴が低い人たちがこんな

に大変な労働環境で働かなければなら  
ないのか」「なぜ非正規労働者の賃金  
がこんなに低いのか」ということを問  
題視して、この「16%」という数字が  
示す大きさを見ていただきたいので  
す。「〇〇さんのところは母子家庭だ  
けど立派にやっている」というのは、  
本人の努力でどうにかなっている話で  
す。どうにかしなくても何とかなる社  
会に変えていかなくてはならない、と  
いうのが「相対的貧困」の考え方です。

地域に暮らす一般家庭のお父さん、  
お母さんを集めて、ある調査を実施し  
たことがあります。「ここに架空のヨ  
シコちゃんという女の子がいます。公  
立小学校に通う5年生です。1年にこ  
の子が最低限必要なものを全部挙げ  
てください」とお願いしました。する  
と、ゲーム機も出てくるし、動物園に  
も行く、博物館にも行く、友達と週に  
1階ファストフードのお店に行く、ワ  
ンピース1枚は必要よね、とか、月に

すると5、6万円くらいかかるのです。  
やはり今の日本ではそれくらいの消費  
は普通のことなのです。大人だったら  
もつとかりますよね。それができな  
い人が16%、国民の6、7人に1人は  
いるということを知っていただきたい  
のです。

—阿部さんは、なぜ貧困問題の研究を  
されるようになったのですか。

**阿部** 私は以前、国際連合や海外経済  
協力基金などで開発途上国の国際開発  
援助の仕事に携わっており、途上国の  
貧困をずっと見てきました。国際開発  
援助といっても、実際その土地の村へ  
行って貧困世帯の人たちの支援をして  
いたわけではありません。年に何度か  
現地へ赴き、政府と交渉したりする仕  
事です。だから、貧困について頭で分  
かったつもりでいても、心では分かっ  
ていなかった気がします。





1994（平成6）年、東京都新宿区の地下道で、ホームレスの強制立ち退きが行われました。それは、私たちが国際開発援助の中で見てきたことと、まるで同じでした。たとえその人たちに法的な居住権がないにしても、そこに居住している人たちの生活の場であるものを、開発の名のもとに追

出してはいけません。どうしても追い出さなくてはいけないのであれば、その人たちが今後、どうやって暮らしていくのか、考えてあげなくてはなりません。法律よりもまず、人権を優先して考えるべきなのです。しかし日本の国内では、人権がまったく無視されていて、河川敷や公園で寝ている人の追

い出しは、今でも起こっています。

私はこの強制立ち退きの後、公園などで野宿するホームレス状態の人たちを支援する団体でボランティア活動を始めました。ホームレス状態の人との出会いは、私に大きな影響を与え、社会にはびこる貧困、そして社会的排除の構造について深く考えさせられました。パトロールや清掃、炊き出しなどを通じて彼らとかわり、会話をし、生活を見ていくうちに、この問題を解決するためには、まずこの状況をきちんと納得するデータで示し、世間に広く知っていたる必要があると考えたのです。このころはまだ、貧困に関する基礎的な調査が進んでいませんでした。それから貧困問題の研究に本格的に取り組みことにしました。

### 「貧困」の視点でみる

—日本は、貧困に蓋をしている？ 見

せないようにしているのでしょうか。

**阿部** 見ていないのです。みんな、目の前にあっても見て見ぬふりをしているのだと思います。ホームレスの問題も「本人の問題でしょ。好きでやってるんですよ。路上で寝ないというチョイスだつてあるのに、選択肢としてそこで寝ているんだ」と言います。お酒を飲んで寝ている人を見れば「お金があつてもお酒を飲んじゃうからそんな状況になるんですよ」と自己責任論で片付けてしまい、そこから先は考えない。確かにお酒などでお金を使えば果たしてしまう人もいます。でも、保健師さんなら分かると思います。それが依存症であつた場合、アルコールもギャンブルも、本人の意思で「ハイ、やめましょう」なんて無理な話です。そして、お酒に走らなければならぬ、社会の病理がそこに隠れているのです。

「貧困」という視点を加えて見れば、おのずと問題は見えてくるはずなのです。そうでなければ目の前にあつても見過ごしてしまいます。日本は、自国の貧困について、あまりにも理解がないと感じます。

—阿部さんのような研究者の声が、直接政策につながることはあるのですか。

**阿部** 私たちの意見が、すぐに政策につながることはありません。私が発信したもので、もし、国に届いているとすれば、それは私からの直接のものではなく、社会、世論を通してのもので、す。一番動くのは、マスメディアで取り上げられて、普通の人たちが知るようになり、声を上げていくことです。それに政治家が敏感に反応して、政治家のほうから行政を動かしていくのです。私たちが出している報告書よりも、

一般向けに書いた本のほうがよっぽどインパクトが大きいです。国民は、自分たちが言っていること、自分たちが思っていることは何も反映されないと思っているかもしれません、実際一番大きいのはそこなのです。地道だとは思いますが、保健師さんや、団体からの要望書を組織だつて提出したりするのは意外に効果があると思います。

### 誤った情報を伝える マスメディア

—確かに政治は、世論の盛り上がりに対しては対応が早いですね。

**阿部** ただし、マスメディアの取り上げ方には、少し疑問を感じるところもあります。

たとえば最近、芸能人の生活保護受給について騒がれましたが、あれは不正受給でもなんでもなく、問題性もあ

りませんでした。マスメディアが大きく取り上げて、お茶の間で話題になったという方向にまで向かってしまいました。きちんと伝えたいマスメディアによる悪影響は大きいと思います。結局のところ、よりセンセーショナルなほうに走るので。国民も、刺激的な情報のほうに興味を示すところもあるかもしれません。このような情報の出し方ではなく、「生活保護と年金とを比べて生活保護のほうが高い。こんな年金はひどい。もう少し年金を上げるべきだ」という論調で出すことも可能だったと思うのです。でも、そうではなかった。「生活保護が高すぎるのだ。もっと低くしろ」と。「生活保護費が年金より高い」に対して、「そんなのずるいんじゃないか」のほうが一般受けすると思われたのでしょうか。私は最低保障年金を上げるべきだと考えていますが、ハードルがすごく高い。でも

比較的少数の生活保護受給者の給付を下げることは簡単なので、安易なほうに走っていると思うのです。それから「戦後最大の生活保護受給者数」と度々ニュースに出ていますが、戦後と今とでは人口が全然違います。受給者が増えているのは確かですが、率で言ったら戦後最大ではありません。それなのに、どうして人数で出すのでしょうか。それに諸外国と比較しても日本の受給率は低いのです。

### 社会を変えていく勇気を

—日本の貧困が進んだ原因はどこにあるのでしょうか。

**阿部** 日本の貧困は、おそらく1980年代ごろから進んでいます。あのころは格差の論争もなかったし、貧困が日本にあるなんて誰も思わなかった。でも実際、80年代でも貧困率は10%ぐ

らいあるのです。そのころからもう30年ぐらいたっていますから、そんなに新しい問題ではありません。そしておそらく貧困はすでに、その前の世代から続く二代目、三代目問題と化しています。派遣村に来ているような若い世代は、親の代から貧困を世代間で引き継いでいるのです。依存症にしても、その人だけが依存症の場合もあります。親も、祖父母も、ということもあるでしょう。こうなると、子どもの問題に関して、まず親のほうに対処しなくてはなりません。階層的なものができてしまっている。より先進国型の貧困になってきたと思います。

アメリカでは、子どもが新しいスニーカーが欲しいがために殺人をします。スラム街では実際にそういうことが起こっています。悲しいけれどそれが現実です。そこまで「スニーカーが欲しい」と思わせる社会があるのです。格差のある社会は貧困を助長させま

す。そして自尊心を失わせ、または人々を攻撃的にして反社会的行為に走らせ、人間関係を悪化させます。しかしながら、格差は私たち人間が作ったもの。変えていくことは可能なのです。「ゲーム機なんて必要ないし、この子に与えなくてもいいんじゃない？」と人には言いながら、自分の孫に買わせている人は、偽善だと思えます。もし、おかしいと感じるのであれば、社会全体で、ゲーム機に「NO」という勇気が必要なのではないのでしょうか。

### 相対的貧困を理解して、行政の窓口へ

**阿部** 私は結構、保健師さんにはお世話になっていきます。双子の母なので、子どもが生まれたときには保健師さんが訪問に来てくださいました。それから開発援助の仕事を終えて帰国したときに、たまたま熱があり、成田空港の検疫でそれを書きました。そこから2、

3時間かけて自宅に帰宅すると、30分もしないうちに杉並区の保健師さんが自転車に乗って「ご加減どうですか」と来てくれて、びつくりしたことがありました(笑)。「日本の行政ってすごい！」と思いました。「私はこの地域の保健に守られているんだ」という気持ちがありました。

保健師さんが家庭訪問するという機能は重要で、健康という名目だと介入しやすいですね。児童相談所だったり、健康相談ということで保健師さんが訪れたら受け入れてくれるということもあるでしょう。就労、職業訓練など、いろんな情報をパンフレットで渡すだけでもいい。保健師さんに行政全般の窓口になっていたいただきたいと思

います。—これからやっていきたいことはありますか。

### 阿部 彩さんの本



子どもの貧困  
—日本の不公平を考える  
(岩波新書)



弱者の居場所がない社会  
—貧困・格差と社会的包摂  
(講談社現代新書)

**阿部** ホームページで貧困統計をきちっと提供することです。データは政治を動かす重要なツールです。だから皆さんに分かりやすい形で見ていただきたいのです。本当は最初にやりたかったことですが、なかなかできなくて。今年はそれをやり遂げたいと思っています。